宿場の鴉

紫 李鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その寂れた宿場町は、門前雀羅を張るが如くに閑散としていた。

目次

宿場の鴉 ―― 1

宿場の鴉

その寂れた宿場町は、門前雀羅を張るが如くに閑散としていた。街道を抜ける凩は、竜巻のように土煙を舞い上げ、色づいた公孫樹の葉を吹雪のように散らしていた。旋風に煽られて、どこからか転がってきた壊れた籠が、バタバタと音を立てている〝茶屋〟とある暖簾の戸口で止まった。

その茶屋の厨では、黒々とした豊かな髪を銀杏返しに結い、絣の着物に市松模様の帯をした襷掛けの女が手を動かしていた。女の名はお淑。主の娘だった。お淑には惚れた男もいたが、年老いた父親を一人残すこともできず、身の回りの世話をしていた。

「……お淑さん、仙造さんの具合はどうでぃ」

常連の八吉が病に臥せている、お淑の父親を気にかけた。

「……ええ、相も変わらずで」

お淑は顔を曇らすと、茶漬けを盆に載せた。

「……そうかい。早く元気になって、仙造さんの自慢の喉を聞かせてほしいな」

「ええ。私も、そう願っているんですが……」
八吉の前に茶碗を置くと、お淑は小さなため息を吐いた。
「――お父っあん、お粥ができたよ。具合はどう？」
「……ああ、だいぶいいよ」
布団からゆっくりと身を起こした。途端、
「ゴホッゴホッ！」
仙造が激しい咳をした。
「お父っあん！」
お淑は、仙造の丸めた背中を擦った。
「……すまねえな」
「さあ、布団を掛けて。ゆっくり寝んで」
「……ああ」
お淑はその足で家を抜け出すと、泣きながら駆けて行った。寒風に凍える路傍に、下駄の音が響き渡った。

裏の畑まで来ると、お淑は声を上げて哭いた。仙造の身を案じると涙が止まらなかった。

「……お父っあん、死なないで」

お淑はそう呟いて、襦袢の袖口で涙を拭った。

と、その時。ふと、見上げると、強風に揺さぶられて葉音を立てている公孫樹の枝に、一羽の鴉が止まっていた。

カァー……カァー

鴉はまるで、お淑に同情するかのように、哀しい声で啼いた。

「……慰めてくれるのかい？　……ありがとう」

鴉は、漆黒の瞳を下瞼で被うと、徐に瞼を閉じた。

そんなある朝。暖簾を出そうと戸を開けると、一羽の鴉が戸口でお淑を見上げていた。

「あら、びっくりした。……こないだの鴉かい？　どうした、お腹が空いてんのかい？」

お淑の問いに、鴉は瞼を一度閉じた。

「……何か、あったかしら。ちょっと、待っておくれな」

お淑は急いで廚に行くと、油揚げを一枚手にして来た。

「お食べ」

敷居に揚げを置くと、鴉はお淑をチラッと見上げて、それをくわえた。礼を言うかのように、くわえたままで、もう一度お淑を見上げると、どこへやら飛んで行った。次の朝も、その次の朝も、またその次の朝も、鴉は戸口で待っていた。お淑はその都度、団子だの、干物だのを与えた。

そんな事があって、何日か経った頃。それまで、本復の兆しを見せなかった仙造の病が、いつの間にか癒えていた。なぜ、急に仙造の症状が治まったのか、その訳など知る由もなく、その時は単に奇跡とぐらいに、お淑は思っていた。

仙造は以前のように、廚に立つと、愛想よしのお淑が店を切り盛りした。同時に、あれ程までに荒んでいた宿場町には活気が溢れ、旅籠も茶屋も客で賑わった。そして、俄に元気になった仙造は、その自慢の喉を客に披露した。

え～えんや～～
山の～鴉はよ～
色の～黒いが～
自慢よ～

惚れた～おなごを～
引き立たす～

え～えんや～～
山の～鴉はよ～
女房～子のため～
気張るよ～
女房～逝くときゃ～
ともに逝く～

仙造の唄が終わった途端、戸口からバサッバサッと羽ばたくような音がした。お淑が急いで戸を開けると、そこには、三羽の鴉が見上げていた。
「……あの時の鴉かい？　……家族かしら？　……あっ！」
お淑は、この時思った。仙造の病を治してくれたのは、この鴉ではないかと。偕老同穴（かいろうどうけつ）の鴉を崇（あが）める、仙造の唄が聴きたくて……。
三羽の鴉は、礼をするかのように、こくりと頭を下げると、一斉に飛び立った。

濡れ羽色の三本の羽根を置き土産（みやげ）にして。

完